

ニューヨークからの便り

平成 26 年 2 月 12 日より約 1 ヶ月、マウントサイナイ医科大学（アメリカ・ニューヨーク州）にて短期留学をしている鳴瀬悠さん（医学部 4 年生）。

今回は、鳴瀬さんに貴重なアメリカでの留学生生活をレポートしていただきました。

多民族国家ならではのアメリカの医療現場。患者への様々な配慮、またその国が抱える健康問題が医療の現場からうかがえます。

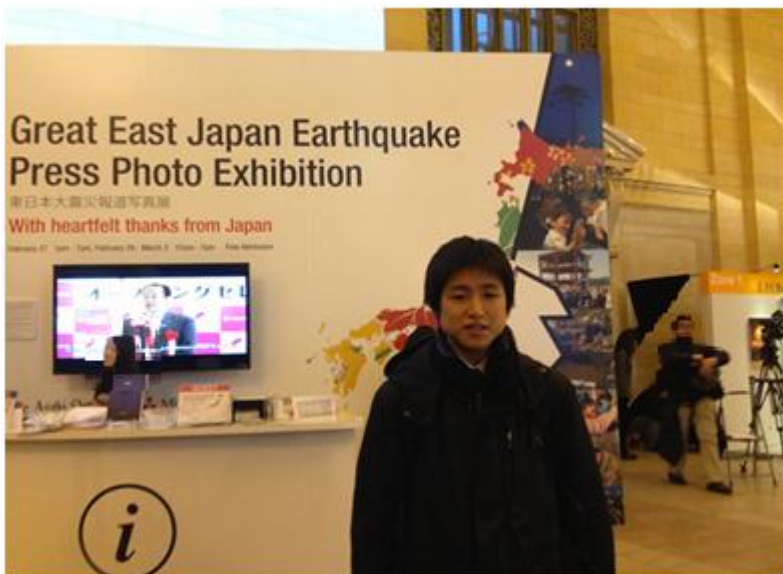
鳴瀬さんからのレポート

実習では毎日新しいことに会います。

私は主に、内分泌・糖尿病部門で実習しています。日本でもまだ BSL をしていないので、各症例はもちろん、初めて実際に見るものですが、ヨーロッパ系の患者の次にアフリカンアメリカンの患者が来て、その次はスペイン語しか話せない患者が来るというようなことは日本ではほぼないと思います。言語が違うときは、電話による通訳システムがあるというのも様々な背景を持つ人が暮らすニューヨークならではのようです。症例報告では、そうしたことも考慮して行われます。治療の方針も日本とは違う部分もあります。また、肥満のための外来診療や手術も一般的に行われているのが、アメリカの問題を表しているように感じました。



9・11 の被災者のフォローアップにて
Dr. Crane と一緒に
災害後のケアの重要性を学びました。



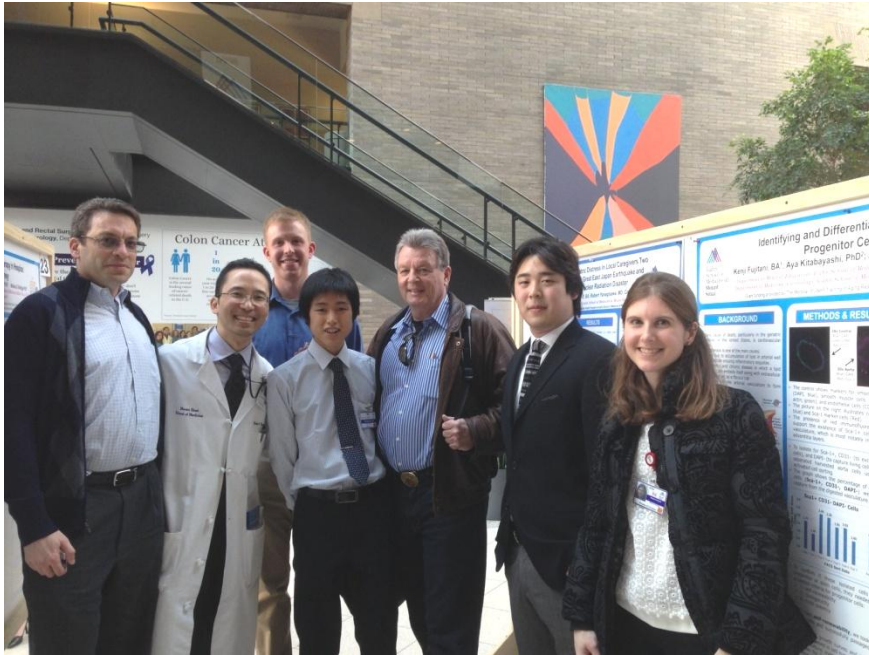
グランドセントラル駅構内で行われた 3・11 の式典にて世界中からたくさんの方が支援してくださったことを改めて実感しました。

このような通常の実習以外にも、来年度交換留学生としてマウントサイナイから福島医大に来る学生と合同プロジェクトについて話し合ったり、こちらの基礎の研究室を見学したり、グランドセントラルパーク内で行われていた 3・11 に関する式典に参加したり、9・11 のフォローアップを見せていただいたり、1 年生や 2 年生のクラスに混ざったりと、課外授業も盛りだくさんです。

この 5 週間は、私の人生に大きな糧を与えてくれるものであり、私の一生の宝になると思います。このような機会を与えてくださった、福島医大の皆様、マウントサイナイ医科大学の皆様、その他の支援していただいた方々には、心から感謝いたしております。

その他活動記録

マウントサイナイ医科大学（以下 ISMMS）と福島県立医科大学では学生間での交流を昨年から進めております。



3月11日にISMMSで開催されたThe Nineteenth Annual Student Research Dayにて昨年の夏に本学で学んだ2名のISMMS学生による、福島の医療関係者たちのバーンアウト（燃え尽き症候群）のリスク調査についてのポスター発表が行われました。

左側より：

Dr. Craig Katz (Disaster Psychiatry)

Dr. Robert Yanagisawa (Endocrinology, Diabetes and Metabolism)

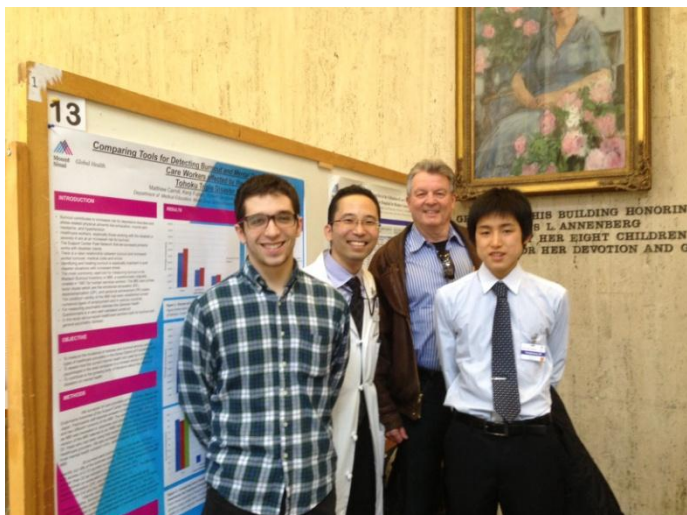
David Andersonさん (ISMMS1年生：今年夏に本学短期留学予定)

鳴瀬悠さん (本学生)

リッチー・ファーチ氏 (NY市の元消防副署長、9.11家族会メンバー)

藤谷健司さん (ISMMS2年生：昨年6月に本学に短期留学)

Phoebe Prioleauさん (ISMMS1年生：今年夏に本学短期留学予定)



去年6月に本学で短期留学されたMatthew Carrollさん (ISMMS2年生) (左端) と彼のポスター前で記念撮影。

Matthewさんは9.11TributeCenterでリッチー・ファーチ氏のPersonal Tourに参加し、その後9.11家族会から震災の悲劇から立ち直り、強く生きていく話を聞いたとのこと。

9.11TributeCenterのサイト

<http://www.tributewtc.org/index.php>